空への冒険

劇団アクトライ

「空への冒険」

脚本……清水大と劇団アクトライ

演出……清水大

演出補…志摩智・茶涙

黒崎曾良…和田絢也

田中充……樋口悠生

原田宇宙…戸松裕之

後藤智仁…高橋耕太

久美子・皐月……茶涙

舞台監督…志摩智

登場人物

・黒崎曾良(クロサキソラ)
物理学の若い研究者。

・田中充(タナカミツル)
黒崎の同僚。

・原田宇宙(ハラダソラ)
未来から来た黒崎曾良。

・後藤智仁(ゴトウトモヒト)
物理学の教授。

・久美子
ボロアパート、ひまわり荘の大家。本作では過去の若い頃で登場。

・皐月
久美子の娘。4月から高校生。久美子のお手伝いをする。

コメント（超重要）

・思うところがあって、あえてちょっと短めにしたり、反応を雑に書いたりしました。練習でも、アドリブをガンガン入れてみて下さい。そうやって、一緒に脚本を作って行きましょう。

参考書籍

「クロノス・ジョウンターの冒険∞インフィニティ(梶尾真治、ソノラマノベルス)」

「きみにしか聞こえない CALLING YOU(「失はれる物語（乙一、角川文庫）」所収)」

「夏への扉(ロバート・A・ハインライン、ハヤカワ文庫)」

オープニング

客電がなるまで

舞台、ホリゾントDOWN
音響、CM再生
舞台、CM終了後ホリゾントUP

照明、地明かり明るく
前説（高橋&清水）
照明、前説終了後暗転

キャスト、暗転中に舞台へ登場
音響、わずかにフェードイン
照明、薄暗い地明かり。今後、1人が話す毎に明るくしていく

ここは、群読のように、そしてハッキリと読むこと

黒崎　K・T・ケラーはこう言った。
原田　未来に影響を及ぼす力は実にたくさんある！　それらの力を動かすものが何であるのか誰も知らないし、その力自体も理解できない。なのに、どうして悩むのだ、と。
田中　それでも人は、未来を知りたがるし、その未来を変えるために、過去をも変えようとする。

久美子　タイムマシンを作るにはどうしたらいいか。過去に戻る理論は発見されているのか。もし過去に戻れるなら、どうするのか。
後藤　未だ見ない、その時空を超える装置へ、人々は想像を掻き立てる。
黒崎　未来は、すぐそこにあるのに、だ。過去を変えるという壮大なテーマに対して、人々は何度も挑んでは、失敗していった。
全員　しかし、過去へと、そして未来へと続く扉は、すぐ側にあるものだ。

照明、ここでMAX
音響、ここからフェードアウト

黒崎　人が持っている可能性は無限というけれど、その可能性が未来へ、どういう影響を与えるのかは誰にもわからない。
田中　もしかしたら、自分の未来を大きく変えてしまう出来事は、今夜にでも起こるのかもしれない。
原田　しかし、そういったことに気がつくのは、大抵もう過去となってしまっている時だ。
久美子　過去を変える……今を、そして未来を変えるためには、過去を変えるしかない。
後藤　普段は妄想で終わるその思いが、時空を超える。
黒崎　そんな出来事があるのだろうか。
原田　いや、ある、と言えるだろう。
全員　何故なら、未来は誰にも分からないのだから。

照明、暗転
音響、フェードイン、音量は耳が痛くならない最大まで

音響、曲が指定された部分まで流れたらフェードアウト
照明、同時にフェードイン、薄暗い地明かり

田中　俺は賛成だ！
黒崎　でも、こんな事が許されると思うか？
田中　許されるも何も、純粋な研究じゃないか。
黒崎　純粋な研究だって？
田中　そうだ。
黒崎　これの何処が純粋な研究だって言うんだよ。
田中　ちょっと冷静になって考えてみれば分かるだろ。頭を冷やせ！
黒崎　お前こそ頭を冷やしたほうがいいんじゃないか、これは倫理的にも止めておいた方がいい。
田中　倫理？　倫理がなんだって言うんだ。昔から倫理というものは、科学技術の発展に大いに貢献してきたものだろう。悪い意味で。
黒崎　それは認めるけど……
田中　なら倫理とかそういう考え方は止めろ。
黒崎　そうは言っても……
田中　この前のデータを忘れたのか。ちょっと取ってくるから、ここで待ってろ。

田中、上手へ退場

黒崎　まったく……馬鹿げてる……タイムマシンの実験なんて……

音楽フェードイン→Full
照明、暗転
黒崎、暗転中に上手へ
黒崎、下手から登場
照明、地明かり薄暗く

黒崎　ああー……今日は疲れたな。

黒崎、上手へ向かって歩く

黒崎　しかし、明日はどうやって田中を説得しようか……あれ？

原田、下手寄りのゴミ捨て場のような所に倒れている

黒崎　なんだ、あれは？

黒崎、ゴミ捨て場に近づく。

黒崎　こ、こっこれ人だ。え、ど、どうしよう……え、えっと、きゅ、救急車、あれ、携帯は？

原田、黒崎に向かって手を伸ばす

黒崎　動いた……？　え、えっと……だ、大丈夫ですかー？

原田　だ、大丈夫、だ……手、手を……
黒崎　あ、はい……

黒崎、原田の手をおもいっきり引き、原田を起き上がらせる

黒崎　だ、大丈夫ですか？
原田　あ、ああ……一時的なものだ……だ、だいじょう～ぶ～……バタリ（倒れる）
黒崎　ちょ、ちょっと、全然大丈夫じゃないじゃないですか。
原田　み、み……
黒崎　え？
原田　み、水をくれ……
黒崎　み、水ですか？　えーと……わ、分かりました。僕についてきて下さい。

黒崎、歩き出そうとするが、原田当然のごとく倒れる

黒崎　ああ、歩けないのか。

黒崎、原田に近づき、

黒崎　ちゃ、ちゃんと捕まっていて下さいねー……

黒崎が原田を背負って歩き出そうとするが、原田途中でずり落ちる

黒崎　ああ、ちゃんと捕まっててって言ったのに……しょうがないなー

黒崎、原田を何らかの方法で上手袖へ運ぶ
照明、黒崎と原田が幕に入ったところで地明かり明るく
黒崎、一度幕に入ってから原田を担いで出てくる
黒崎、上手サスの上に原田を置く

黒崎　はあ……はあ……疲れたぁ……とりあえず水持ってきますね。

黒崎走って上手へ退場。
原田、意識を取り戻す
照明、地明かり薄暗く
照明、下手サスを若干点ける

原田　ん……ん？　ここは……

原田、あたりを見回して

原田　ああ……そういうことか。まずは第一段階、成功って訳か……バタリ（倒れる）

黒崎、戻ってくる
照明、サスを消し、部屋を黒崎の部屋の状態に戻す

黒崎　はい、水ー、水ー、水ー丁ー

黒崎、原田へ水を渡す
原田、ゆっくりと飲む

原田　はあ……ありがとう、もう大丈夫だ。
黒崎　よかった……あんなところで倒れていたから、もうどうしちゃったのかと思って。
原田　最初は死んでいるかと思っただろ。
黒崎　そ、そんな、そんな事無いですよ。
原田　いいんだよ。
黒崎　すみません。
原田　まあ、ゴミ捨て場で寝ている訳じゃないからな……たまたまだ。
黒崎　は、はあ……
原田　ところで、ちょっと聞きたいことがあるんだが。
黒崎　は、はい、なんですか？
原田　今日は、何月何日だっけ？
黒崎　え、今日ですか？
原田　ああ。
黒崎　えーっと、三月二十四日ですね。
原田　アクトライのワークショップ公演がある日だな。
黒崎　は？
原田　いや、なんでもない。ただの独り言だ。
黒崎　は、はぁ……

原田　ところで、今は何年だ？
黒崎　え？
原田　に～せ～ん～……
黒崎　ん～？
原田　じゅ～う～……
黒崎　……
原田　……
黒崎　さん？
原田　さーん！　二〇一三年だな！　ブラボー！
黒崎　あ、あの、すみません。
原田　どうした、黒崎くん！
黒崎　え？
原田　ん？
黒崎　どうして僕が黒崎って名前だってこと知っているんですか？
原田　あ。
黒崎　僕、まだ名乗っていませんよね。
原田　あ、あーあ、あー、それは、そのほら、扉、扉の前の表札を見たのよ。
黒崎　え？
原田　この部屋に入るときにね、ちらっと見えたから、それでね。
黒崎　は、はぁ……
原田　俺、記憶力だけはいいって言われるんだよね、
黒崎　ホントかなぁ……
原田　人を疑うのは感心しないなぁ、黒崎くん。

黒崎　あー……その様子だと、もう具合の方は大丈夫ですか？
原田　ああ、君のお陰ですっかり元気だよ、ありがとう。
黒崎　それはよかった。それじゃあ、一応お家の方まで送りましょうか？
原田　え？
黒崎　いや、もう夜も遅いですし。あ、それとも、電話して家族の方に迎えに来てもらいます？
原田　あー、いや……えーと、俺はこの辺に住んでいるんじゃないんだよ。
黒崎　え、そうなんですか？
原田　ああ。ちょっと用事があってね……旅行をしているんだ。
黒崎　旅行……ですか？
原田　ああ。
黒崎　へえ……どちらから来られたんですか？
原田　んー……遠い、遠いところからだよ。
黒崎　遠い所……あ、もしかして外人さんだったりするんですか？
原田　え、ああ、いや、俺はれっきとした日本人だよ。
黒崎　えー……
原田　そんな残念そうな目で見ないでくれよ。えーっと……その……あの……北海道。そう、俺は北海道から来たんだよ。
黒崎　あ、北海道ですか。実は僕、今年の夏休み北海道へ旅に行くんですよ！
原田　え？（ここは台詞というよりはヤバイ表情と声）
黒崎　原田さんは北海道のどちらに住まれているんですか？
原田　え、あの、北海道……ほか、さ、札幌だよ。
黒崎　へえー、じゃあ何か、行っておいたほうがいいところとかあります？
原田　え、そりゃあ、その、あれだよ。と、時計台とか！

黒崎　あーやっぱり行っといたほうがいいですか。
原田　ああ。
黒崎　……他になんかあります？　地元の人しか知らないような名所。
原田　え、あー、そりゃあ、その、札幌駅前の居酒屋とか。
黒崎　え、そんなところが？
原田　なにせ北海道だからな、魚がうまいんだ。
黒崎　はあー……あ、そういえば、まだお名前を伺ってなかったですね。
原田　ああ、そうだなあ……まあ、えーと、俺の名前は、原田。原田って言うんだ。
黒崎　原田さん……ですか？
原田　ああ、フルネームは原田宇宙。宇宙と書いて、ソラと読む。
黒崎　僕は黒崎です。黒崎曾良。
原田　ああ、改めて、助けてくれてありがとう。
黒崎　いえいえ……ところで、原田さんは、ホテルとかとってらっしゃるんですか？
原田　え？
黒崎　いえ、旅行じゃないんですか？
原田　ああ、いや、テント、テントでキャンプをしようと思って、アウトドア道具を持ってきたんだけどね。
黒崎　え、それは今何処に？
原田　いやあ、どうやら不埒な人に盗まれちゃったみたいでね。それで途方に暮れていて、疲れでゴミの山にダーイブってね。
黒崎　そんな……大変じゃないですか。警察には？
原田　言ったよ。言ったけど、彼らは盗まれたものを探すには、あまり役に立たなくてね。
黒崎　じゃあ、今晩はどうするつもりで……？

原田　そうだなあ……どこか泊まれる場所があればいいんだけど……
黒崎　ああ、なら駅前にビジネスホテルがありますよ。
原田　いや、実は財布もテントと一緒に盗まれてしまってね、一文無しときたものだ。
黒崎　え、じゃあ……
原田　んー……まあ、あのゴミ捨て場で一晩を明かそうかな、っとね。
黒崎　そ、そんな、それはよくないですよ。また具合でも悪くなったら……
原田　でも、他に泊まれる場所なんて無いからね……タダでなんてね。
黒崎　よし、じゃあ、じゃあ、ここ、ここ使って下さい。
原田　え？
黒崎　この、僕の部屋を使って下さい。
原田　でも
黒崎　ぼ、僕には原田さんを見捨てることはできません。
原田　黒崎くん……
黒崎　ま、まあ、布団は一つしか無いですけど……
原田　一緒に寝る？
黒崎　えー
原田　まあまあ、冗談だよ。
黒崎　そんなこと言っていると、やっぱり泊めるのやめちゃいますよ。
原田　そんな、勘弁してよ～……謝るから。
黒崎　もう……原田さんは床で寝て下さいよ。
原田　分かっているって。留泊めてもらえるだけでも、感謝感激モノだよ。
黒崎　そんな。
原田　ありがとう。本当ッにありがとう！

黒崎　ぼ、僕は人として当然のことをしたまでですよ。
原田　……優しいな、黒崎くんは。
黒崎　え？
原田　いや……そうだ、ついでにもう一つお願いしてもいいかな。（原田立ち上がる）
黒崎　え、なんですか……？
原田　君は、この写真の男を知っているかい。

原田、ここで上手サスの中に収まる
黒崎、それに追従

黒崎　え、こ、コイツは……
原田　ああ、コイツは田中充。そして君は、どうやら彼を知っているみたいだね。

照明、徐々に暗転
照明、原田と黒崎にサスかFollow、不可なら地明かりを薄暗く

黒崎　何故、原田さんが田中のことを。
原田　それは……しかし、こんな話をしても信じて貰えないかもしれない。
黒崎　え、そんな事無いですよ。何なんですか。
原田　分かった。じゃあ、俺がここに来る前の話をしよう。

後藤、この前の台詞の間に下手サスの下へ

原田　教授、教授。

照明、地明かりちょっと明るく
照明、上手サスを弱く
照明、下手サスON

後藤　ああ、君か。
原田　どうですか、タイムマシンの様子は。
後藤　それが……まだ反応は無いようだ。
原田　そんな……だって、もうこんなに経っているのに……
後藤　ああ。もう帰ってきてもいいのだが……
原田　今日も、まだ来ていないのですね……
後藤　ああ。
原田　気が付かない内に戻ってきたという可能性は？
後藤　いや、それはないだろう。流石にエネルギーが通れば、記録が装置に残っているだろうからね。
原田　そうですよね。
黒崎　ちょ、ちょっと待って下さい。

照明、地明かりカットし、上手サスをON
後藤と原田、下手刺に入っている、入りきらなければ照明、地明かりを薄く

原田　どうした？

黒崎　ということは、もしかしてあなた達はタイムマシンを？
原田　まあ、半分正解ってトコかな。
黒崎　え？
原田　君たちも作ったんだろ、タイムマシン。
黒崎　な、何でそれを知っているんですか？
原田　んー、そうだなあ……この先生の顔に見覚えはないかい。

照明、下手サスを強く

黒崎　ご、後藤教授！
原田　そうだよ……君たちの先生、後藤教授だよ。
黒崎　な、何で後藤教授が……
原田　まあ、それは今はいい。僕らの前にあるあの機械、あれこそが後藤教授の作った、タイムマシンだよ。
黒崎　僕らのマシンと一緒だ……
原田　おそらく原理も一緒だろう……当然君は、あのタイムマシンの原理を知っているね。
黒崎　ええ……莫大なエネルギーに、物体を構成する設計図だけを載せて過去に送る……まあ、設計図と言うよりは、自動で分子レベルからその物体を組み立てるプログラムですけどね。
原田　そう、君たちはすでにペンで成功しているだろう？
黒崎　はい、ペンとかクリップとか、万が一知らない所に転送されたとしても違和感のないものを選んで試しました。
原田　そう……僕達もそうだった。ところで黒崎君。

黒崎　はい？
原田　じゃあ……人間を送ったことはあるかい？
黒崎　え？

照明、上手サスを弱く

原田　そもそも……戻って来られるんでしょうか、本当に。
後藤　……私にもそれは分からない。この10年間それを研究し続けていたが……分からない。
原田　理論的には可能じゃないですか。
後藤　もちろん、しかし、実際にそうなるかどうかが分からない。
原田　だったら……だったら、僕が試しちゃダメですか？
後藤　何だって？
原田　教授……気づいていましたか、今日で丁度10年なんですよ……
後藤　分かっているよ。あれから、今日の事を忘れたことはない。
原田　だから……だから僕が止めに行きます。今から10年前の、2013年に！
後藤　ダメだ！　そもそもうまくいく保証もない。それに、君まで戻ってこなくなったら、私は一体どうすればいいんだ。
原田　大丈夫です。その辺は適当に行方不明ということにでもしてもらって……
後藤　そうじゃないよ！　もうこれ以上大事な教え子たちを失いたくないんだよ……
原田　教授……
後藤　分かってくれ。
原田　教授のお気持ちはお察しします。でも……それでも僕は、彼を助けに行きたいんです。
後藤　しかし……

原田　後藤教授……あなたが僕達を大切にしてくれるように、僕も親友であるアイツを……田中充を助けに行きたいんです！

後藤　……

照明、上手サス強く
照明、下手サス OFF
後藤、退場

黒崎　え、ちょ、ちょっと待って下さい、田中？　田中充ってまさか……

原田　そのまさかだよ、黒崎君。

黒崎　そんな……

原田　だから、俺は2023年からこの2013年に来たんだ。アイツを……田中を助けるためにね。

黒崎　え、じゃあ、さっき言っていた人を過去に飛ばしたことがあるって……

原田　残念ながら……その田中のことなんだ。

黒崎　えぇ！

原田　あいつが過去へ飛んで十年が経った。それなのにまだ帰ってきていないんだ。

黒崎　そんな、だってさっき、僕と口論したばっかりですよ！

原田　田中は2013年の3月24日……つまり、まさに今日タイムマシンを使ったんだ。

黒崎　今日？

原田　ああ。正確には24日の22時28分。ところで黒崎君。今の時間は？

黒崎　え～と……22時丁度です。

原田　時間がない、まずいぞ黒崎くん、急いで研究室へ向かうんだ。

黒崎　は、はい。

原田、走って上手に退場
黒崎、直ぐに後を追う
照明、暗転
田中、暗転中に下手サスへ
照明、下手サスフェードイン

田中　くそ……ここが上手くいっていないのか？

田中、タイムマシンをコントロールパネル的な、iPad みたいな奴で操作している

田中　これでいいはずなんだけど……

田中、ボタン類をいじる
音響、SE

田中　よし、後は座標をセットして……エネルギーが供給できるのを待てば……

黒崎と原田、上手より次の台詞のタイミングで登場
照明、同時に全体を少し明るく

黒崎（声）田中ー！
田中　誰だ！
原田（登場）俺だ！

田中　誰だよ！
黒崎（登場）オレだ！
田中　なんだ黒崎か。
原田　分かってくれたか。
田中　いやお前は誰だよ。
原田　何ー？　俺のこと忘れたのか。
田中　いや知らねえよ。
黒崎（田中と原田を遮って）ちょ、ちょっと原田さん。
原田　何だよ。
黒崎　話をややこしくするの止めて貰えませんか。
原田　えっ。
黒崎　そこら辺でおとなしくしていて下さい。
原田　あ、ああ……
黒崎　ところで田中。
田中　なんだよ、こんな夜中に大学にどんな用があるんだよ。
黒崎　その台詞そのままそっくりお前に返してやるよ。お前こそ何やってるんだよ。
田中　そ、それは……お前が中々実験に同意してくれないから、こうやって地道にデータを集めているんじゃないか。
原田　人のせいにするのか！
田中　だってコイツが反対するから……って、ホントにあんた誰だよ。
原田　オレが誰かなんてどうでもいい！　お前、その後ろで光っているものは何だ！
田中　え！
原田　それは、タイムマシンのメインエネルギータンクだろ、知っているんだぞ！

黒崎　そうだ。僕達は、お前がタイムマシンを起動しようとするのを止めに来たんだぞ！
田中　な、何でそれを知っているんだよ。
黒崎　それはな……なんとなくだ！
原田　なんとなくだ！
田中（呆れながら）……
黒崎　さあ、早くそのマシンを止めて……エネルギーを抜け。
田中（本気で悩みながら）……
黒崎　おい、田中、どうした……
田中（土下座して）頼むッ！　見逃してくれ！
黒崎　えっ。
田中　オレは、オレは今日どうしても過去へ行かなきゃいけないんだ、だから、見なかったことにしてくれ。
原田　無駄だ、いくら俺達が見なかったことにしたって、そんなに莫大なエネルギーを使っちまったら明日には教授に気づかれるぞ。
田中　そこを何とか。
原田　何とかって……なあ？
黒崎　というか原田さん。
原田　何だ？
黒崎　やっぱり、見て見ぬふりってできないんですかね。
原田　はぁ？

田中、この辺りで黒田と原田の様子を伺いつつ、タイムマシンの微調整へ戻る

黒崎　だって、何か田中も事情があるみたいだし……まあ、戻ってくることにかけて。
原田　そんなこと言っていられるか。現に戻ってきていないんだぞ。
黒崎　でも……
原田　でもじゃないよ。
黒崎　大体、何で田中は過去へ行こうとしてるんですか？
原田　そういえば、それは俺も知らないな。
黒崎　知らないのに止めようとしているなんて酷いじゃないですか。
原田　だって、しょうがないじゃないか。
黒崎　何がですか。
原田　まあほら、本人がすぐ目の前にいるんだから直接聞いてみれば……っつて田中――！
黒崎　あー！

田中、黒崎と原田が関係ない話をしている間に、いつの間にかタイムマシンの準備を終えている、今まさにスイッチを入れようとしているところ

田中　すまんな、黒崎と知らないオッチャン。無事帰ってくるから、心配するなよ。
原田　このバカヤロー、おい、今すぐ止めろ。
黒崎　田中、行くな！（と言って一歩ふみ出すが）
田中　待て！
黒崎（田中の台詞に一瞬たじろぐが）そんな危険なものにお前を乗せるわけにはいかないんだよ！

音響、轟音
照明、暗転

照明、地あかり
黒崎と田中、ステージ中央に倒れている
黒崎、起きる

黒崎　何処だ……ここ？

黒崎、あたりを見回して

黒崎　ああ……そうだ。確か田中を止めようとして……そして……どうなったんだ？

黒崎、倒れている田中に気がつく

黒崎　おい、田中……起きろよ田中……
田中　う～ん……
黒崎　おい、田中……しっかりしろ、田中！
田中　う～ん……もう食べられない……
黒崎　何言ってるんだよ……
田中　満腹だぁ……
黒崎　おい田中、起きろよ、おい。
田中　（急に起きて）もう食べられないって言ってるだろ！

黒崎、びっくりして固まる
田中、黒崎をしばらく見つめて

田中　……バタン。（再び寝る）
黒崎　……いやいやいやいや、今起きただろ。
田中　……
黒崎　また寝た……のか？

田中、無言で寝たまま

黒崎　しょうがない……それで、一体全体ここは何処なんでしょうかね。

黒崎、立ち上がって周辺を探索する

黒崎　何か、よく見るとこれ……あ、あれは……

黒崎、上手に駆け寄って

黒崎　懐かしい！　あれは昔通いつめていた駄菓子屋じゃないか……今はもう無いのに。

黒崎、しばらく懐かしがってから

黒崎　あれ……でも今はもう無いはず……記憶違いかな。それとも違う駄菓子屋なのか……あ、あー、もしかして！　あの時タイムマシンに巻き込まれて……まさか。

黒崎、上手に退場

田中、黒崎が退場してから起きる

田中　ん～……ん、ここは何処だ？

田中、ゆっくりと起き上がりながら辺りを見回して

田中　あれ……マシンに入れた場所じゃないぞ……ちょっとズレたのか？

田中、手元のiPad的なものを確認する

田中　あ……こんなにズレてる……とりあえずこのタイムマシン、どうにかしないと……

黒崎、上手から戻ってくる

黒崎　お、田中、目を覚ましたのか！

田中　え、く、黒崎？

黒崎　どうした田中？

田中　何故お前がいる！

黒崎　何故って……俺が未来人だからさ。

田中　意味が分からねえよ……え、まさかお前も一緒にタイムスリップしたのか？

黒崎　だって、お前が無理矢理タイムマシンを起動しようとするから。

田中　馬鹿、近づくなって言っただろ。

黒崎　まあ、いいじゃないか。

田中　よくねえよ。大体、本来の目的地とは大幅にズレて到着したんだぞ。
黒崎　お、そういえばさっきそこに駄菓子屋があってな、
田中　人の話聞けよ！
黒崎　だって、懐かしかったんだぞ。俺が中学生の時には潰れてたんだぞ。
田中　おい！　いい加減にしろ！
黒崎　どうした田中、怒っているみたいだぞ。
田中　怒ってるみたいじゃないの！　怒ってるの！
黒崎　え？
田中　当たり前だろ！
黒崎　いや、どうかしたのか？
田中　どうかしたのかじゃない！　お前のせいで思いっきり場所がズレたじゃないか！
黒崎　だってそれは、お前が無理矢理行こうとするから……
田中　もういい！
黒崎　は？
田中　もういいって言ってんだろ！　お前の言い訳なんか聞きたくない。
黒崎　どうした急に。
田中　ええい、いい加減にしろ。

田中、タイムマシンを持って去ろうとする

黒崎　ちょ、ちょっと待てよ田中！
田中　うるせぇ、俺に触るな！

田中、黒崎を突き飛ばす

黒崎　痛てぇな……何すんだよ！
田中　それはこっちの台詞だ！　お前までタイムスリップしやがって！
黒崎　知らねえよ、俺は何度も止めただろ！
田中　だから勝手に行かせろって言ったんだ！　それなのにお前は……余計なお世話だ！
黒崎　大体、現在に戻って来れなくなるかもしれないんだぞ！
田中　だからどうした！　俺はそれでも構わない。
黒崎　何言っているんだよ。
田中　とにかく、俺は行くからな！
黒崎　おい、田中！

田中、無視して行こうとする

黒崎　お前がそこまで戻りたい過去って一体なんなんだよ！
田中（止まる）……！
黒崎　何で、そこまでして過去に戻りたいんだよ。ちゃんとした理由があるなら、俺と教授を説得してからでよかったじゃないか。俺達は親友じゃなかったのかよ！　親友を無視してまで、お前が戻りたい過去っ何なんだよ！
田中　……
黒崎　おい、何とか言えよ。
田中　……クソッ。
黒崎　はぁ？

田中　……どうしても聞きたいか。
黒崎　え？
田中　約束しろよ。
黒崎　何をだよ。
田中　聞いたら、俺を手伝うって、約束しろよ。
黒崎　え……
田中　それでも、聞くか？
黒崎　……分かったよ。お前のことだ、それをやり遂げるまで帰るつもりはないんだろ？
田中　ああ。
黒崎　ならいいよ、聞いてやるよ。
田中　分かった。

黒崎と田中、舞台のヘリにでも座る

田中　そうだなぁ……何処から話そうか。
黒崎　俺は何処からでもいいぞ！
田中　うーん……じゃあとりあえず、コレを見てくれよ。

田中、分厚い茶封筒を黒崎に渡す

黒崎　なんだこれ？　手紙か？

黒崎、茶封筒の中身（400万円くらいの現金が入っている）を確認する

黒崎　こ、これ、現金じゃないか！
田中　あんまり大声出すんじゃないぞ。
黒崎　しかもこんなにたくさん。
田中　ああ、大体400万円くらい入ってるかな。
黒崎　よよよ、400万？
田中　おう。
黒崎　ど、どうやってこんな大金手に入れたんだよ。
田中　どうだと思う？
黒崎　え……ま、まさか盗んだとか？
田中　は？
黒崎　あ、そしてそれをこれから返しに行くとか！
田中　（黒崎に突っ込んで）アホか！
黒崎　いてっ。
田中　そんな訳ないだろうが、この馬鹿野郎。
黒崎　ス、スマン……
田中　これはな……俺の母親から貰ったものなんだよ。
黒崎　えっ。

照明と音響、なんか適当に変化

田中　俺の母親はな、死んだんだよ……10年前に。
黒崎　10年……前？
田中　ああ。2003年の3月25日だよ。

黒崎　となると……俺たちがいた日は2013年の3月24日で……お前がタイムスリップしたのが10年前だから……まさかそういうことか！

田中　ああ。俺が行きたかったのは2003年の3月25日。もっと言えば14時46分だな。まあ、実際は移動時間とかも入れてその1週間位前になるように設定したけどな。

黒崎　お前……その母親に会うために？

田中　会うというか、死に目に立ち会いたかっただけだ。

黒崎　そうだったのか……

田中　ああ。この金はな、母親が毎月俺のために溜めていた金なんだ。

黒崎　でも、何で母親のその……その時に立ち会わなかったんだ？

田中　2003年といえば、というか、20002年の4月かな。丁度俺たちが大学に入学した歳だろ？

黒崎　そういやそうだったな。もうあれから10年か。

田中　俺は高校生の時、あんまり家に帰らなかったんだ。

黒崎　え？

田中　離婚したんだ、父親と母親がな。

黒崎　ウソだろ？

田中　ウソだったらよかったさ。離婚する前だって、毎日喧嘩ばかりして仲が相当悪かった。

黒崎　そうなのか……

田中　その挙句に、父親が浮気したりしてな……家の中は散々だった。あの空気に俺は耐えられなかった。

黒崎　……

田中　高校生の時、さすがにグレることはなかった。でも、駅前のマクドナルドとかで勉強して、家にはいないようにしてた。

黒崎　マクドナルドってお前……金とかは。

田中　金は、夜寝るために家に帰ってから母親からせびってた。俺は母親をただの財布としか思っていなかったがな。

黒崎　……

田中　そして俺は大学に入って、一人暮らしを始めた。やっとあの家庭から開放される。俺はたまに届く母親からの手紙なんかも全部無視して、大学生活に没頭した。サークルは楽しかったし、何より今の後藤教授に出会った。まだ1年生だったが、あの先生の物理学は面白くて、俺はいつも質問に行っていた。

黒崎　そうだったな。確か俺達が出会ったのも、後藤教授の部屋だったよな。

田中　ああ。そこで俺達は、タイムマシンの話も聞いた。

黒崎　そうだ。それで研究者になることを決意したんだ。

田中　俺もそうだ。そしてその年の冬、俺は母が死んだことを知った。実は危篤だという連絡もきていたんだ。

黒崎　でもお前は確か大学皆勤賞だったよな。

田中　ああ、その通り。俺は母親には会いに行かなかった。

黒崎　それで、会いに行こうと思ったのか？

田中　その時は何も思わなかったが……後日、遺品整理のために春休みを使って実家に帰った。そのとき、祖母から渡されたのが、この封筒なんだ。

黒崎　それで……

田中　この封筒には、金だけじゃなくて手紙と写真も入っていた。俺は、この時初めて後悔したんだ。

黒崎　田中……

田中　その時になって、初めて母親の気持ちに気がついた。俺に黙って金を渡してくれていたのだって、きっと母親もこういう離婚騒動に高校生だった俺をまきこみたくなかったん

だな……てさ。

黒崎　……

田中　俺は、自分のことしか考えていなかった。俺を一番分かってくれていた人の、最後の瞬間にも立ち会えなかったんだぜ……

黒崎　田中……

音響、フェードイン

照明、暗転

田中と黒崎、暗転中に退場

後藤（声）なるほどね……そういう訳ですか。

後藤、暗転の間に上手サスの中へ

原田、同じく暗転の間に上手サスの隣（下手側）に椅子を置き、その上に座る

照明、入れ替わりに上手サスを強く

照明、地明かり

原田、椅子に座っている

原田　ええ、まあ……しかし、教授は私のことを信じて貰えるのですか？

後藤　まあ、今現在の私がタイムマシンを完成させているんだから、その10年後に、しかも私の研究室のスタッフが過去に戻ってきたとしても、何ら不思議ではないからね。

原田（立ち上がって）ありがとうございます、教授。

後藤　いいんだよ……ところで、原田君、と言ったかな。

原田　ええ、はい。
後藤　君、なんだか黒崎君に似ているね。
原田　え？
後藤　別に、僕の勘違いならいいんだけど。
原田　……と言うと？
後藤　まあ、気にしないでくれ。ところで、過去に戻った時に、強い衝撃を感じたといったね。
原田　ああ、はい。
後藤　となると……やはり衝撃を吸収する何かを作ったほうがいいのか。
原田　あ、でも。
後藤　でも？
原田　僕がタイムスリップした時もすごい衝撃だったので……多分10年後　　の2023年までには直らないと思いますよ。
後藤　あらら……そうか。
原田　はい。
後藤　そうだなあ……まあ、ひまわり荘に寄ってから帰るかな。
原田　え、ひまわり荘に？
後藤　ん？　知らないのかね、ひまわり荘。
原田　いえ、知ってはいますけど……黒崎君が住んでいる下宿ですよね。
後藤　まあ、そうだけどね。
原田　何故そこに寄っていくのですか？
後藤　いや、万が一彼らが今日中に戻ってこないとなるとね……なにかと厄介事になりそうだからね。
原田　確かに、久美子さん心配症ですしね。

後藤　へぇ……
原田　あれ、教授、ご存知なかったんですか？
後藤　いや……原田君が、何で久美子さんを知っているのかと思ってね。
原田　え？
後藤　さて……行きますかな。
原田　ちょ、ちょっと待って下さいよ後藤教授。
後藤　いいけど……何か奢ってくれる？
原田　え、何で僕が教授に奢らなきゃいけないんですか、普通逆でしょ。
後藤　いや、だって君は2023年から来ているんだから……2013年の現代では年長者じゃない。
原田　それでも教授よりは若いですよ。
後藤　僕ね……実はまだ30代なの。
原田　ウソっ！？
後藤　ウソ。
原田　ウソかよ！
後藤　まあいいじゃない……ウソをつくのはお互い様だよ。
原田　え？
後藤　ほら、大学のそばに美味いステーキ屋があるから、そこへ行こう。
原田　あ、そこって結構お高い店じゃないですか。
後藤　いいじゃないか、別に。
原田　いやいや……それにこんな時間ではやっていませんよ。
後藤　確かにそうだね……（時計を見て）いや、まだやっているぞ。
原田　そ、それはでも……ほら、大学近くのファミレスとかあるじゃないですか。あそこなら24時間営業ですよ。

後藤　ファミレスなら君に奢ってもらわなくても……
原田　やっぱり奢らせるんですか。
後藤　当たり前だよ。それにまあ……口止め料だと思ってもらえば。
原田　……まあ、そうですよね。
後藤　流石に気づくよ。10年の付き合いだからね。
原田　分かりました……それじゃあ、久美子さんのところに行って、ファミレスへ行きましょう。
後藤　なら、とりあえずタクシー呼んでくれる？
原田　は？
後藤　いや、タクシー。
原田　いやいや、ここからなら歩いていけるじゃないですか。
後藤　僕疲れちゃった。
原田　知りませんよそんなこと。
後藤　いいじゃないか……ステーキからファミレスになったんだから。
原田　って、タクシー代も僕に出させるつもりですね。
後藤　そうだけど？
原田　さも当たり前のように言わないでください。
後藤　まあまあ……ほら、行くよ。

後藤、原田を連れて上手舞台袖へ

原田　ちょ、後藤教授、元気じゃないですか。
後藤　知らないなぁ。

原田　ちょっと、後藤教授〜

照明、暗転

後等と田中、暗転中に下手へ

黒崎　なるほど……とりあえず今は、2003年の3月25日で、おおよそ8時頃って訳か。

田中　らしいな……あんまりは時間ないな。

黒崎　確かお前の母親には……14時46分まえに会いに行けばいいんだよな。

田中　ああ、そうだな。

黒崎　とりあえず、病院までの行き方を調べよう。

田中　確かに……ここが何処だか俺にはさっぱり分からん。

黒崎　大丈夫だ。俺は昔この辺の中学校に通っていたんだ。地理はばっちり、ってな！

田中　……なんだそのギャグは。

黒崎　え？

田中　いや、地理はバッチリって……

黒崎　う、うるせえな……偶然だよ、偶然。

田中　まさかすべるとは思ってなかったんだな。

黒崎　いいじゃねえか、ほら、とりあえず駅に行くぞ。

田中　ああ、そうだな。

黒崎と田中、移動を始めようとする。

田中　ところで黒崎。

黒崎　何だ。
田中　あの、男は、一体何者なんだ。
黒崎　ん、あの男っていうと？
田中　ほら、あのお前と一緒に俺を止めに来たやつだよ。
黒崎　ああ……原田さんって言うんだ。
田中　原田？
黒崎　ああ。原田宇宙。宇宙と書いて、ソラと読むらしい。
田中　……その胡散臭い男は、何者なんだ。
黒崎　んー、よく知らないけど、未来から来た。
田中　はぁ？
黒崎　未来からきて、そこでは後藤教授と一緒にタイムマシンの研究をしているらしい。
田中　お前、それ、信じたのか？
黒崎　え？
田中　だからお前はすぐ騙されるんだよ。
黒崎　いや、別に今まで騙されたこととかないぞ。
田中　嘘をつくな、嘘を。この前のアレ、忘れたとは言わせないぞ。
黒崎　アレ？
田中　当サイトの登録料と延滞金が支払われておりませんので……
黒崎　な、なんだよ、そんな事かよ。
田中　まったく、相当うろたえていたくせに。
黒崎　う、うるさいなぁ。大体あれは、若干身に覚えがあったというか、何というか。
田中　まあいいけどさ、お前、あのときは相当慌てていたよな。
黒崎　もう、そんなことは忘れろよ。

田中　まあともかく、あれは嘘だろうな。
黒崎　そんな……だったら何で。
田中　おそらく、どこかからタイムマシンを開発しているという情報を聞きつけて……まあ、スパイか何かじゃないのか。
黒崎　そんな……そんな訳ないだろ。
田中　訳ないことはない。むしろ筋は通っている。
黒崎　大体、あの人はお前が今夜、タイムマシンを使う事を知っていたんだぞ。
田中　まあ、確かに……それは腑に落ちないな。
黒崎　だろ？
田中　ただ、黒崎。俺にははっきりと言える事がある。
黒崎　何だ？
田中　俺には、原田という名前の親友はいない。
黒崎　え？
田中　あいつは、親友としてこの俺、田中充を助けに来たんだろ？
黒崎　あ、ああ。
田中　だったら当然、俺もその原田とかいう男のことを知っていて当然だよな。
黒崎　え、あ、まさか……
田中　ああ……俺はあの原田という男を知らない。
黒崎　でも、未来から来たならこれから出会う人なんじゃ。
田中　落ちつけ黒崎。あいつの話では、俺は今日……というか、あのタイムスリップした日から、帰ってきていないんだろ。
黒崎　あ。
田中　だとすれば……あいつの言っていることは嘘だと言うことだ。

黒崎　なるほど……
田中　全く……お前それでも理系か？
黒崎　いやあ……まあ。
田中　そんなんだから後藤教授にいつも怒られるんだよ。
黒崎　面目ない。
田中　全く……ほら、さっさと行くぞ。
黒崎　お、おう。

久美子、ここに来るまでに登場し、舞台後方で掃除をし始める
黒崎と田中、舞台上をちょっとだけ移動（去ろうとする動作）

黒崎　あれ……
田中　どうした？
黒崎　あの人……久美子さんじゃないか？
田中　え？　誰だそれ？
黒崎　いや、俺のアパートの大家さんなんだけどさ……あんなに若かったかな。
田中　お前、地味に失礼なこと言うのな。
黒崎　娘さんかな……？
田中　まあ、何かと苦労があったんじゃないのか。
黒崎　そうなのかなぁ……
田中　ほら、行くぞ。
黒崎　いや、でも、その
田中　いいから、時間もないんだし。

久美子　あの～……
二人　！！
久美子　どうか……されました？
田中　い、いえ、別に……すみません騒がしくて。
久美子　ああ、いえ、私の家に何か御用かと思って。
黒崎　え？
久美子　え？
田中　バカッ。
黒崎　ここって、久美子さんのお家なんですか？
久美子　え？
黒崎　あれ、違いました？
久美子　そうですけど……何で私の名前を？
黒崎　あ、いえ、その……

黒崎、目で田中に助けを求める
田中、無視

黒崎　そうなんですか！　いやあ、偶然だなぁ。
久美子　え？
田中　は？
黒崎　いやあ、実はね、あなたに似ている久美子さんと知り合いなものでね……ついそう呼んでしまったんですよ。でもまさか合っているなんて！
久美子　ふふふ……そうですね。

黒崎　いやあ、すみません。
久美子　いえいえ……いいんですよ。あなたは？
黒崎　え？
久美子　いえ、あなたのお名前は？
黒崎　ああ、えーっと……黒〜
久美子　黒？
黒崎　いえ……原田、原田って言います。
久美子　原田さんですか？
黒崎　ええ。原田宇宙。宇宙と書いて、ソラと読みます。
久美子　まあ……素敵な名前なんですね。
田中　DQNネームじゃねえか……
黒崎　お前は黙ってろ。
田中　サーセン。（久美子に）ところで、僕たちはもう行かないと……
久美子　あら、もう行ってしまうのですか？
黒崎　ええ、まあ。ちょっと用事でね。
久美子　それは残念。黒崎さんとなら面白いお話ができると思いましたのに。
黒崎　いやあまあ……照れるなあ。
田中　……行くぞ。
黒崎　え、ああ。それじゃあ、

黒崎と田中、退場

久美子　ふふふ……面白い人。

照明、暗転
音響、なんか急いでいる感じの音楽

田中　おい、どの電車乗ればいいんだ。
黒崎　JRで行くんだから……これじゃないか？

照明、一瞬暗転

田中　おい、逆方向に走りだしたぞ！
黒崎　やばい、間違えた！
田中　何やってんだよ、とにかく次の駅で降りるぞ。
黒崎　あ、これ急行だ……
田中　馬鹿！　次の駅着くのいつだよ……
黒崎　さ、さあ……

照明、一瞬暗転

田中　やっとここまで着いたが……
黒崎　ここからは……えーと……あの電車に乗り換えればいいんだな。
田中　本当か？　なんか信用出来ないんだが。
黒崎　まあまあ、俺を信じろよ。
田中　……なんか信用出来ない。他の人に聞いてくる。
黒崎　え、乗ろうぜ。

田中　いや……あ、すみません。ちょっと……
黒崎　あ、んなこと言ってるから、あの電車でちゃったぞ。
田中　おい、やっぱり違うじゃないか。
黒崎　あれ？　そうだった？
田中　馬鹿野郎。正しくはあっちだってよ。ほら、行くぞ。
黒崎　お、おう……

音響、フェードアウト
照明、暗転して地明かり
田中と黒崎、疲れている

田中　……やっと着いたぞ。
黒崎　おう……疲れたな。
田中　今……何時何分だ。
黒崎　色々あって、もう14時半だ……早く行った方がいい。
田中　分かった……じゃあ、行ってくる。
黒崎　おう……行ってこい。
田中　俺、別に変な顔していないよな？
黒崎　大丈夫だ……ほら、行ってこいよ。
田中　分かった……

田中、上手に去る

黒崎　いやあ……最後に良い事をした気分だ。

間

黒崎　田中……一人で大丈夫かな……まあ、俺がいたらもっとややこしいことになってるんだろうけど……

黒崎、ウロウロする

黒崎　ちょっと散歩でもしてくるかな……邪魔しちゃ悪いし。

久美子、登場

久美子　あれ……原田さん？

黒崎、気が付かない

久美子　……原田さん？

黒崎　あ、久美子さん！

久美子　こんなところでまたお会いするなんて……偶然ですね。

黒崎　ええ、さっき出会ったばかりなのに……あれ、ところで久美子さん？

久美子　はい。

黒崎　随分早いですね……どうやってここまで来られたんですか？

久美子　どうやってって……電車ですよ？
黒崎　電車？　それにしては早すぎませんか？
久美子　そんなことないですよ、地下鉄で一本ですし。
黒崎　は？
久美子　え、あの、私の家からですよね？
黒崎　え、ええ。
久美子　それなら地下鉄で、乗り換えなしの15分で着きますけど。
黒崎　え。
久美子　時々JRを使う人もいるんですけど……アレだと高い上に無駄に時間がかかるんですよね……って、どうしたんですか、原田さん。
黒崎　いや、別に……そういう馬鹿もいますよね、世の中には。
久美子　なんだかよく分からないですけど……ところで、黒崎さんはどうしてここへ？
黒崎　いえなに……友人の母親が入院しているもので。
久美子　あら……そうなんですか。
黒崎　はい……久美子さんは？
久美子　ああ……私も母がちょっと体調を崩していましてね。
黒崎　あ、そうなんですか。
久美子　ええ……それでお見舞いに。
黒崎　それは……大変ですね。
久美子　ええまあ。でも、大したことはないみたいで。
黒崎　それはよかった……あれ……
久美子　どうかされたんですか？

黒崎、足に力が入らなくなり、床に手を着く

久美子　だ、大丈夫ですか原田さん！

黒崎　ああ、大丈夫です。急に足の力が抜けて……うっ。

久美子　ちょ、原田さん？　どうしたんですか、大丈夫ですか？

黒崎　大丈夫大丈夫……ちょっとフラフラして……

久美子　私、お医者さん呼んできます。

黒崎　いや、いいから……

久美子　いえ、急いで戻ってきますから、原田さんはそこにいてくださいね。

久美子、走って上手に退場

黒崎　く……まさか……過去に戻ろうとしている……？

黒崎、何とか立ち上がる

黒崎　まずい……田中、田中は……田中は無事に会えたのか……？

黒崎、下手へ向かって、

黒崎　田中！

黒崎、下手に退場

久美子、上手から登場し

久美子　原田さん、今お医者さんが……って、原田さん？　……いない。

音響、タイムスリップするときの音。

照明、可能であれば下手袖から光

久美子　なんだろう……今の。

久美子、下手に走って退場

照明、暗転

後藤と原田、上手から登場

後藤　ごめんください。

皐月、下手から登場

皐月　はいは～い……あ、後藤教授。

後藤　あれ……お母さんは？

皐月　ああ、母はちょっと旅行に行っていまして。

原田　なんだ、久美子さんいないのか。

皐月　何か急なご用ですか？

後藤　いやね、黒崎君の事でちょっと。
皐月　黒崎さん……？　ああ、うちの住人の。
後藤　ええ、彼のことでちょっと。
皐月　でもお母さんいないし……連絡したほうがいいですかね。
後藤　いや、そこまで急ぐ用事じゃないから。
皐月　そうですか？
後藤　ああ。
皐月　ところで……そちらの方は？
原田　ああ、僕ですか。
皐月　ええ。
原田　僕は、原田宇宙。宇宙と書いて、ソラと読みます。
皐月　へえ……個性的なお名前ですね。
原田　そうですか？
後藤　一応言っておくと、個性的って褒め言葉ではあまり使わないからね。
原田　ちょ、後藤教授。
後藤　……しかし、君は本当にお母さんにそっくりだね。
皐月　そうですか？
後藤　そうだよ。10年位前のお母さんとは見分けがつかないよ。
皐月　それって、私が老けているって言いたいんですか？
後藤　え、いや、そういう訳じゃないけどさ。
皐月　もう……私は華の女子高生ですよ！　お母さんより若いんです。
後藤　まだ高校生じゃないでしょ。
皐月　いいんです、もう1週間もすれば高校生です！

後藤　そうか……君もついに高校生か。
皐月　ええ、なので今度からは、私も母を手伝って、ここの管理をやります。
後藤　へえ、そうなの。
皐月　はい。今日がその最初の日なんです。
後藤　そうかそうか。
皐月　それにしても……10年前なんて言ったら、私はまだ6歳ですよ。
後藤　あら、まだその話気にしていたの？
皐月　気にしますよ！
後藤　いやあ、でもまあ、あの頃の久美子さんは結構若かったよ。
皐月　それ……お母さんに言ったら怒られますよ。
後藤　あ。
原田　教授、失言が多いですよ。
後藤　いいじゃないか別に。
皐月　良くないですよ。

音響、奥（下手側SP）からドン、と鈍い音

皐月　あれ……何か大きな音がしましたね。
後藤　何かあったのかな。
皐月　ちょっと、見てきますね。

皐月、下手に退場

原田　しかし、久美子さんってそんなに若かったんですか？
後藤　まあ……10年前の久美子さんだったら、今の皐月さんと殆どそっくりだったね。
原田　へえ……そういえば……
皐月（声）きゃあーーーーー！

下手から久美子の叫び声

原田　な、何かあったんですかね？
後藤　さあ？

皐月、下手から走って登場

皐月　た、大変です。
後藤　どうした？
皐月　それが……

黒崎と田中、下手から登場。ちょっとフラフラしている

黒崎　あれ……後藤教授！
田中　ホントだ……それにあの知らないおっちゃん。
原田　おっちゃんとはなんだ、おっちゃんとは。俺には原田宇宙って立派な名前があるんだよ。
後藤　どうやら無事戻ってきたみたいだね。
田中　教授……すみませんでした！

後藤　いや、別に私は構わないんだけどね……
田中　え？
皐月　あの、一体何がどうなっているんですか？
田中　く、久美子さん！
皐月　ええ！
黒崎　本当だ！　若いころの久美子さんだ！
皐月　ちょっと、何失礼なこと言っているんですか。私は華の女子高生ですよ！
後藤　まあまあ皐月さん……落ち着いて。
皐月　きょ、教授……
原田　ああそうか……黒崎君はまだ皐月さんを知らないんだもんね。
黒崎　皐月……さん？
原田　そう、この子は久美子さんの娘さんで皐月さん。もうすぐ高校生になるから、それで久美子さんのお手伝いで大家の仕事をやっているんだよ。
黒崎　はぁ……
後藤　9月3日生まれだから久美子さん、そして5月生まれだから皐月さんと……単純にも程があると私は思うんだけどね。
皐月　ちょっと、後藤教授。それ私地味に気にしているので、ネタにしないでもらえますか。
黒崎　なんだ……一瞬、過去から若い頃の久美子さんを連れてきたのかと思った。
皐月　え？
黒崎　あ。
皐月　過去からって……どういうことですか？
黒崎　いや、あの、それは……
後藤　まあまあ……詳しいことは私が話しておくから、とりあえず今は彼らを休ませてあげて

もいいかい。
皐月　え、ああ、はい、分かりました。
原田　あ、そう言えば後藤教授……うっ。

原田、足の力が抜けて床に手をつく
この次の台詞同時に

皐黒田　原田さん！
後藤　黒崎君！

間

皐黒田　……え？
原田　ちょっと教授……それ、最大の失言ですよ。
後藤　そうだね……やっぱり今日は君の言う通り失言が多いみたいだ。
黒崎　ちょ、ちょっと待って下さい。黒崎って。
原田　ああ……俺は10年後から……親友である田中を助けに来た……黒崎、曾良だ。
田中　はあ？
黒崎　え、じゃあ原田さんは……俺？
原田　そうだ……2023年のお前だ。
黒崎　じゃあなんで最初っからそう言って、
原田　まあ、いきなり自分が来るのも何かと問題になりそうだったからな……とっさに他人のフリをさせてもらった。

黒崎　そうなんですか……
原田　まあ、後藤教授にはバレていたみたいだけどね。
後藤　ん、僕は君を黒崎君と呼んだことはないよ？
原田　ついさっき呼んだじゃないですか。
後藤　……バレたか。
田中　そうか……だから黒崎と一緒で騙されやすかったのか。
黒崎　おい！
原田　確かに……タイムマシンに乗る直前のアレは見事に騙されたな……でも、君だって僕らを騙すつもりじゃなかったんだろ。
田中　まあ、そうですけど。
原田　なら、俺は騙された訳じゃないな。
田中　って、そんなのどうでもいいんだよ。おい、未来の黒崎。何でお前はそこまでして、俺を助けに来たんだよ。
原田　何でって……そんなの、決まっているだろ。
田中　何？
原田　お前と俺は……親友だからだよ。
田中　そんな、いくら親友だからって。
原田　いいじゃねえか……お前は、いつも研究熱心で、成績も良かった。今にして思えば、お前は過去に行きたかったから必死になっていたんだろうが……俺は、一生懸命に研究に取り組んでいるお前の足を引っ張っていたんじゃないかって思っていた。
田中　そんな……
原田　あの日……お前が過去に飛んだ日、俺とお前は口論したよな。
田中　ああ。過去に人を送る実験をやってもいいかどうかって。

原田　あの時……あの時俺が賛成をして、ちゃんと２人でタイムマシンを整備していれば……それだけじゃない。俺がもっと一生懸命に研究に取り組んで、もっと精度がよく、エネルギーも使わないタイムマシンが開発できていれば……俺は、お前がいなくなってからずっとそうやって後悔していた。

田中　黒崎……

原田　田中……。お前の執念が……お前が過去に戻りたいと思うその強い気持ちが、俺を動かしたんだ。

田中　……

原田　お前が何故過去に戻りたかったかは知らないが……お前が戻ってきてくれないのは、何より辛かった。これは、俺の自分勝手な願望だ……

田中　でも、そのお陰で俺はこうして現代に戻ってこられたんだろ。原田さん……いや、黒崎。お前のおかげだ。

原田　なに……俺は、過去に戻っただけだ。

田中　黒崎……

原田　さて……そろそろ俺も戻らなければいけないようだ……もう体がもたない。

後藤　黒崎君……

原田　後藤教授、突然押しかけたのに、ありがとうございました。

後藤　いや、いいんだよ。

原田　（黒崎に）それじゃあ、そろそろ行くわ。

黒崎　は、原田さん……

原田　原田じゃねえよ、未来のお前だよ。

黒崎　未来の……俺……

原田　じゃあ、巻き込むといけないから、俺は外に出てるわ。

黒崎　え、ちょっと、
原田　じゃあな。

原田、持てる限りの力を全て使って上手に走って退場

黒崎　ちょ、ちょっと……

音響、タイムスリップの音
照明、可能なら上手袖から光

黒崎　行っちゃったか……
田中　ああ……

間

皐月　じゃ、じゃあ……私、何かご飯作ってきますね。
田中　え？
皐月　いやあ……お腹、空いていませんか？
後藤　じゃあ、僕も手伝うよ。
皐月　え？
後藤　いやね……原田くんにファミレスを奢ってもらう約束だったんだけどね。
黒崎　え？
後藤　あ、じゃあ、みんなでファミレス行く？

皐黒田　え？
後藤　まあ、タクシー呼ぶからさ。
皐月　はぁ……
後藤　皐月さん、少しくらいならアパート開けても大丈夫だよね？
皐月　まあ……夜中ですし。
後藤　なら、みんなで行こうじゃないか。電話貸してくれる？
皐月　あ、はい。こちらです。

皐月と後藤、下手へ去る

黒崎　……田中。
田中　なんだ、黒崎。
黒崎　えーと、あの、その。
田中　ん？
黒崎　すまん！
田中　……は？
黒崎　いや……俺がちゃんとお前に協力していればよかったんだ。すまん！
田中　……それを言うなら、俺も悪かった。
黒崎　え？
田中　俺は、お前には何を言っても無駄だと思っていた。どうせ倫理だとか、そういう訳の分からない事を理由にして、実験に協力してくれないと思っていた。
黒崎　そんな……
田中　俺も、ちゃんとお前とか、後藤教授に話して、そして、過去に戻るべきだったんだ。そ

のせいで、未来のお前にこんなことをさせてしまった。俺こそすまなかった。

黒崎　……ええい、まあ、もういいじゃないか。

田中　え？

黒崎　ほら……結局過去は変わった。そして、未来も変わったんだから。

田中　……そうだな。

間

田中　黒崎。お前のお陰で、俺の過去も変えることが出来た。ずっとわだかまりになっていた事を、解決することが出来た……ありがとう。

黒崎　いや……田中……過去を変えたのは俺じゃないさ。お前自身だよ。

田中　黒崎……

間

黒崎　あ、そう言えば田中。

田中　なんだ？

黒崎　いや……何でもない。

田中　何だよ。

黒崎　……俺達って、すごい研究しているんだなって。

田中　（笑って）ああ、そうだな。

黒崎　さて……じゃあ、早速研究するか？

田中　は？

黒崎　だって、早く完成させないと……未来の俺がお前を止めに来られないかもしれないだろ。
田中　そうだな……どんどん改良をすすめないとな。
黒崎　ああ。
田中　でもその前に……腹ごしらえだな。
黒崎　ん？
田中　いや……腹減っちまったよ。過去から帰ってきたらな。
黒崎　色々あったもんな……若いころの久美子さんにも会ったしな。
田中　そうだな……そういやあの時、お前原田って名乗っていたな。
黒崎　いやあ……現代で会う久美子さんに、本当の名前名乗ると、色々厄介かな、と思ってね。
田中　全く……お前、やっぱり原田って男と似ているな。
黒崎　そうか？
田中　そうだよ……あれがお前の未来だ。
黒崎　何か……ちょっと嫌だな。
田中　まあ確かに……ああいうオッチャンにはなりたくないな。
黒崎　ちょっと陽気すぎるよな……俺、将来ちゃんと生活出来てんのかな？
田中　さぁな……お前を見ていると、無理そうだけどな。
黒崎　おい！
田中　まあ、気に入らないなら、これからお前が変わればいい。そうすれば、お前の未来は変わるんだ。
黒崎　そうだな……よし、じゃあ、じゃあ、後藤教授のところ、行きますか。
田中　後藤教授にも頑張ってもらって、早く研究を進めないとな。
黒崎　よし、じゃあ行くか……田中。
田中　おう、黒崎。

照明、暗転

音響、フェードイン

カーテンコール